

JSPS Stockholm Newsletter

Vol. 48



Prologue 01

スウェーデンの人と自然

News 02

2015年ノーベルウィーク/デンマーク同窓会設立に向けたボードミーティングの開催/第8回Kyoto International Forum for Environment and Energy (KIFEE)への参加/マルクス・ヴァーレンベリ賞/Stockholm Seminar on Japanおよび国際会議“Japanese and Nordic Development Cooperation in a Post-MDG Era”の開催/2015年度第2回KVA-JSPSセミナーの開催/森元誠二在スウェーデン日本国大使離任レセプションへの出席/フィンランド同窓会幹部会、総会、セミナーの開催/IVA-JSPSセミナーの開催/第3回東北大学・KTHインターナショナル・ワークショップの開催

Reports 10

2015年度第1回 KVA-JSPSセミナーの報告
SAC Activity Seminar: “Japanese Ethics and Technology”
「ポスト2015年時代における日本の開発協力」(セミナー・国際会議)
KVA-JSPSセミナー報告
その他打合せ・来会等
コラム～スウェーデンのパン「ルッセカット」～

Academic Information 20

スウェーデン: 日本・スウェーデン学長サミット/スウェーデン: 医学サイエンスセミナー「貧困の病に対するノーベル賞」/スウェーデン: 学生を対象とした高等教育に関する調査/デンマーク: Agnete Gersing氏がデンマーク高等教育・科学省新事務次官に就任/デンマーク: 2016年研究開発予算配分への合意/ノルウェー: カブリ賞受賞者一般講演会/ノルウェー: 2016年度教育支援のための予算5億ノルウェークローネ増/フィンランド: EU/ETA外からの留学生より授業料徴収/フィンランド: Global Education Industry Summit開催/リトアニア: 日本・リトアニア生命科学シンポジウム開催/ KI Bladet

Notice 25

イベント予定
事業のご案内
カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) 同窓会会員募集
JSPS Stockholm Newsletter 定期購読

スウェーデンの人と自然

JSPSストックホルム研究連絡センター長 阿久津 秀雄

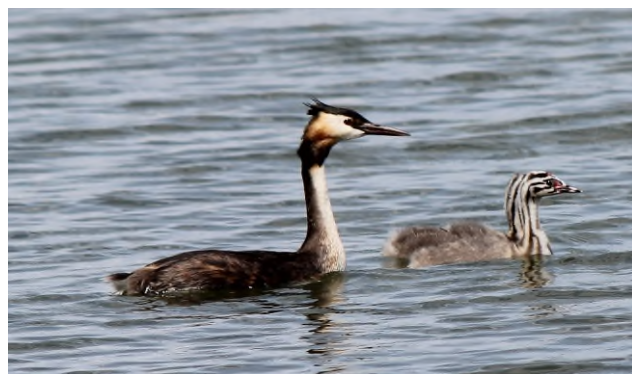
ストックホルムで生活していて最も強く感じるのは季節の移り変わりが日本の四季とかなり違うことである。日本では春は暖かくなり、草木から動物に至るまで活気を取り戻す時期と考える。しかし、スウェーデンでは春は暖かいとは限らない。体感温度では一年はほぼ短い夏と長い冬からなり、春と秋はそれらを繋ぐ短い緩衝帯である。しかし、自然を見ると春になれば草木は緑に芽吹き、花に色づく。雪でも降りそうな寒さの中で可憐に咲く草花は春の訪れを知らせてわれわれの心を温めてくれる。渡り鳥は時を忘れずに訪れ、産卵と子育てに取り組む。カササギ等の留鳥や冬を生き抜いた動物たちも春を忘れない。これらの動植物に春を知らせるのは何であろうか。スウェーデンで、寒暖とは無関係に季節とともにはっきり変化するのには昼と夜の長さである。冬は昼が非常に短く、北方では太陽が地平線から顔を出さない時期もある。一方、夏は昼が非常に長く、北方では太陽が沈まない白夜となる。この昼と夜の長さが植物や動物の成長に影響を与える現象は光周性(photoperiodism)と呼ばれ、1920年に W. W. GarnerとH. A. Allardにより大豆の実験で発見された。彼らは昼の長さが花芽の時期を決定していると考えたが、後に夜の長さが決定要因であることが明らかになる。スウェーデンでは晴天が少なく、昼の日差しは不安定であるので、日差しのない夜の長さが花芽をつける時期、すなわち春を知らせるのに使われていることは納得がいく。動物の場合も生殖腺の発達などに光周性がある。したがって、スウェーデンの季節は夜の長さの変化とともに変化していくと考えられる。しかし、花を咲かせて実をつけたり、雛が成長していったりするためにはさまざまな生化学反応が関係するので気温も重要である。寒さに耐えるだけでは不十分で、寒さと不順な天候の中で生きていく特別なメカニズムが必要と考えられる。そのメカニズムを明らかにすることは今も北欧の生命科学者の重要な研究課題となっている。

花が春を忘れなければ、人は花に春の訪れを重ねる。こうしてスウェーデンでは人間の季節感も気温の寒暖よりも夜と昼の長さに支配されている。花が咲けば寒くても春の始まりであり、



春を告げるクロッカス

6月の夏至祭には寒くても夏を祝う。この太陽暦と気候の乖離は人々の生活を多様にしているように見える。街を行く人々の服装は一年を通して実にさまざまで、ノースリーブとダウンジャケット姿が並んで歩いていることも珍しくない。人々の個性や感性も多様化しており、型にはまったことを嫌う。これはスウェーデンがファッションや芸術で成功している一つの要因であろう。



冠カイツブリの親子

しかし、人は仕事をし、食べていかなければならない。スウェーデンの寒冷で不順な天候は中世以前の主要産業であった農業の生産性を落とすとともに不安定にした。そこで人々は気候に左右されない仕事を求めた。スウェーデンの幸運は豊富な鉱山資源に恵まれたことである。これに目をつけたハンザ同盟の商人やドイツ・オランダの製鉄業者がスウェーデンに進出し、鉱石採掘と精錬を行い、大陸へ輸出した。こうして17世紀にスウェーデンはヨーロッパにおける主要な鉄鋼輸出国の一つとなった。1681年に建設されたエンゲルスバーリ製鉄所(Engelsberg Ironworks)はユネスコの世界遺産となっており残っている。スウェーデンは鉄の精錬法の革新にも貢献した。英国のHenry Bessemerが1856年に空気を吹き込むだけで鉄を精錬する画期的な方法を開発した。しかし、それは彼の精錬所では成功したが、他の精錬所では成功しなかった。その時、スウェーデンの製鉄技術者が鉄の分析からリンと硫黄が含まれていると精錬が上手くいかないことを突き止め、この革新的方法の復活と普及に貢献した(<http://www.jernkontoret.se/en/the-steel-industry/the-history-of-swedish-steel-industry/>)。これは当時のスウェーデンの科学技術レベルの高さを示すものである。因みに、化学分析は今日においてもスウェーデンの得意な分野である。スウェーデンは20世紀に入っても鉄鋼の重要な供給地であった。第2次世界大戦ではスウェーデンの鉄を得るためにナチスドイツと連合国が輸出港であったノルウェーのナルビクで死闘を繰り広げている。

スウェーデンの製鉄業は鉄を使うさまざまな産業の発展を促し、さらに化学産業、情報技術産業の発展へとつながった。これらの産業は天候に左右されなくなっているが、それを担う人間にはやはり環境の影響が色濃く残っているように思う。この地の動植物と同じく、さまざまな変化への対応は実に忍耐強い。戦争の世紀のまっただ中であって過去200年間中立を守って戦争には加わらない忍耐強さ。リンネの研究に典型的に見られる学術研究における粘り強さ。身近なことでは、しばしば起こる公共交通機関の故障や遅延にも慌てず騒がず、じっと待つ忍耐力。スウェーデンの人と自然には強い絆を感じる。

2015年ノーベルウィーク

スウェーデンの科学者アルフレッド・ノーベルの命日である12月10日に、毎年ノーベル賞の授賞式が行われる。この日を含む1週間は「ノーベルウィーク」と呼ばれ、ノーベル財団主催の講演会や晩餐会など様々な行事が行われ、世界が注目する1週間となる。

2015年は大村智氏（北里大学特別荣誉教授）がノーベル生理学・医学賞を、梶田隆章氏（東京大学宇宙線研究所長）がノーベル物理学賞を受賞され、日本でもこれらの行事が連日報道されていた。

2015年のスケジュールと行事内容を以下のとおり紹介する。

【12月7日（月）】

13時よりカロリンスカ医科大学（Karolinska Institutet）において生理学・医学賞、17時30分よりSwedish Academyにおいて文学賞のノーベルレクチャーがそれぞれ行われた。生理学・医学賞のノーベルレクチャーが開催されたAula Medica には、1,000名の収容が可能な講堂に入りきらないほど多くの聴講者が訪れ、受賞者の大村智氏、William C. Campbell氏、Youyou Tu氏の3氏の講演に聞き入る姿が見られた。

【12月8日（火）】

9時よりストックホルム大学にて物理学賞、化学賞、経済学賞のノーベルレクチャーが行われた。物理学賞のノーベルレクチャーでは梶田隆章氏、Arthur B. McDonald氏の2氏が研究にまつわるエピソード、共同研究者への感謝の言葉を含めた講演を行った。

また、12時より、ストックホルム市内において在スウェーデン日本国特命全権大使夫妻主催による祝賀会が開催され、スウェーデンで研究活動を行っている日本人研究者や、日本と関係の深いスウェーデンの学術機関関係者等が受賞者を祝福した。祝賀会終了後には、大使館主催による邦人報道関係者向け記者会見が開催され、大村氏、梶田氏が揃って記者の質問に回答した。

19時から、ストックホルム・コンサートホールにおいてノーベルコンサートが開催され、受賞者を含めた観客はFranz Welser-Möst指揮による、ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団の演奏を堪能した。



物理学賞のノーベルレクチャー直後の様子



邦人報道関係者向け記者会見の様子

【12月9日（水）】

9時30分より、ノーベルウィークダイアログが開催された。本イベントは、2012年より毎年スウェーデンにおいてノーベル賞授賞式の時期に開催されている一般向けの公開シンポジウムである。4回目の開催となる今回は、「The Future of Intelligence」というテーマのもと、ノーベル賞受賞者や世界で活躍するトップレベルの科学者の他、報道関係者や企業の役員、政治家等、幅広い分野から32名のパネリストが集結し、講演やパネルディスカッションを行った。1000人を超える参加者が会場を訪れ、当日の様子はオンデマンドでライブ中継された。



ノーベルウィークダイアログ会場の様子



ノーベルウィークダイアログ
パネルディスカッションの様子

【12月10日（水）】

16時30分よりコンサートホールにおいて授賞式が、19時よりストックホルム市庁舎において晩餐会が開催され、各賞の受賞者と関係者が出席し、ロイヤルファミリーも来賓として出席した。授賞式及び晩餐会には、安西祐一郎日本学術振興会理事長夫妻が出席し、受賞者たちを祝福した。

デンマーク同窓会設立に向けたボードミーティングの開催

2015年9月11日、デンマーク工科大学において、デンマーク同窓会設立に向けてボードミーティング(幹部会)が開催された。デンマーク同窓会の立ち上げについて、ボードメンバーの役割、同窓会の規程、会員増加方法、活動計画等に関する議論が行われた。また、デンマーク同窓会設立総会と、同日開催予定のJapan Alumni Assemblyについて日程、会場、講演者等に関する意見交換を行った。Japan Alumni Assemblyは、JSPSストックホルム研究連絡センター、在デンマーク日本国大使館、東海大学同窓会デンマーク支部会の共催で開催を予定している。



ボードミーティング参加者

第8回Kyoto International Forum for Environment and Energy (KIFEE)への参加

2015年9月20日～23日にかけて、ノルウェー工科大学・自然科学大学(NTNU)において、環境とエネルギーをテーマとしたシンポジウムが開催され、最終日の23日には阿久津センター長がJSPS事業紹介を行った。シンポジウムには約140名が参加し、内約40名は日本からの参加であった。



阿久津センター長によるJSPS事業紹介の様子

ノルウェーおよび日本の研究者、学生、公的機関職員が講演を行い、各講演の後には活発な質疑応答が行われていた。また、プログラムにはワークショップが含まれ、Electrolysis Systems and Advanced Inorganic Materials、Process Engineering、Advanced Biological Materials、Educationの4つのセッションに分かれて講演が行われた。

同シンポジウムは京都議定書に端を発し、京都の大学によって始められた。持続可能な社会の発展を目指す大学間の、戦略的協力関係のために国際的な場を発展させることを目的としている。京都の大学とNTNUは長期に渡り良好な関係を築いていたため、ノルウェーの大学も同シンポジウムに参加する運びとなった。

第1回は2005年10月に京都において開催され、以降京都とトロンハイムで交互に開催されている。

KIFEE

<https://www.ntnu.edu/web/kiffee/about-kiffee>

マルクス・ヴァーレンベリ賞

2015年9月28日、ストックホルム市内において、マルクス・ヴァーレンベリ賞授賞式が開催され、スウェーデン国王カール16世グスタフ陛下から磯貝明東京大学教授、齋藤継之同准教授、西山義春フランス国立科学研究庁植物高分子研究所(CERMAV-CNRS)上級研究員に賞が授与され、磯貝教授による演説が行われた。翌日の29日には、同市内において、記念シンポジウムが開催され、西山上級研究員は”The Cellulose Microfibril: A Universal Building Block of Plant Biomass”、齋藤准教授は”TEMPO-mediated Oxidation as a Tool for producing Nanofibrillated Cellulose”と題する講演を行った。聴衆は熱心に聞き入り、講演後には活発な質疑応答が行われた。

マルクス・ヴァーレンベリ財団は、1980年に、ヨーロッパ最大の製紙・木材販売会社Stora Kopparbergs Bergslags Aktiebolag (現ストラ・エンソ社)によって設立され、森林や木材科学における基礎研究や利用技術の研究開発を奨励するため1981年から同賞の授与を開始した。同賞は、長く同社の取締役を務めたマルクス・ヴァーレンベリ氏の功績を称えたものであり、「森林/木材科学分野のノーベル賞」または「森のノーベル賞」とも言われる。

マルクス・ヴァーレンベリ財団

<http://mwp.org/>

共同通信

<http://this.kiji.is/42397650377146368>



磯貝教授による演説
共同通信ホームページより転載



西山CERMAV上級研究員による講演



齋藤東京大学准教授による講演



質疑応答の様子

Stockholm Seminar on Japanおよび 国際会議“Japanese and Nordic Development Cooperation in a Post-MDG Era”の開催

2015年9月30日、JSPSストックホルム研究連絡センター、ストックホルム商科大学欧州日本研究所(EIJS)、在スウェーデン日本国大使館、Swedish Institute of International Affairs、ストックホルム大学、The Swedish Defence Universityの共催で、ストックホルム商科大学において、“Development Cooperation in a Post-MDG Era: Can Japan effectively continue to contribute to global development?”をテーマとしたセミナーを開催した。セミナーには約50名の参加者が集まった。

Marie Söderberg EIJS所長の挨拶に始まり、大野泉政策研究大学院大学教授による“Japanese Development Cooperation in the Post-MDG Era”と題した講演が行われた。聴衆は熱心に聞き入り、講演後には活発な質疑応答が行われた。

翌日の2015年10月1日～2日にかけて、JSPSストックホルム研究連絡センター、EIJS、大阪大学の共催で、ストックホルム商科大学において、国際会議“Japanese and Nordic Development Cooperation in a Post-MDG Era”を開催した。会議には約20名の参加者が集まった。

Söderberg所長の挨拶に始まり、大野教授による“Japanese Development Cooperation in a New Era: Recommendations for Network-based Cooperation”と題した講演の他、北欧諸国および日本の研究者10名による講演が行われた。

(p.12に大野教授によるレポートを掲載)

ストックホルム商科大学

<https://www.hhs.se/en/about-us/calendar/eijs/?category=pastEvents>



Stockholm Seminar on Japanにおける
大野教授による講演



国際会議における大野教授による講演



国際会議参加者による集合写真

2015年度第2回KVA-JSPSセミナーの開催



ウプサラ大学での講演

当センターは2009年度からスウェーデン王立科学アカデミー(KVA)との共催で、当地で関心が高い研究業績を有する日本の研究者の講演会を企画・開催している。

2015年度第2回目となる今回は、今堀博京都大学物質・細胞統合システム拠点教授を招聘し、2015年10月12日、14日、16日、19日にスウェーデン王立工科大学(ストックホルム市)、ウプサラ大学(ウプサラ市)、シャルマーシュ工科大学(ヨーテボリ市)およびルンド大学(ルンド市)において同セミナーを開催した。

今堀教授は、”Molecular Engineering for Photoinduced Charge Separation and Its Applications”と題した講演を行った。セミナー期間中100名以上の学生や研究者が出席し、講演後には活発な質疑応答が行われていた。スウェーデン王立工科大学、シャルマーシュ工科大学、ルンド大学では阿久津センター長がセミナー参加者にJSPS事業紹介を行った。

(p.13に今堀教授によるレポートを掲載)

森元誠二在スウェーデン日本国大使離任レセプションへの出席

2015年10月14日、在スウェーデン日本国大使公邸において離任レセプションが開催され、当センターからは阿久津センター長、川窪副センター長が出席した。

レセプションには政府・防衛・学術・文化・ビジネスなど各分野の関係者が多数集まり、森元大使からは、在任中の外交活動に対する協力に謝意を示すとともに、2018年の日瑞国交樹立150周年に向け、今後二国間関係が益々深まることを祈念するスピーチが行われた。

在スウェーデン日本国大使館
<http://www.se.emb-japan.go.jp/nihongo/>



森元大使によるスピーチ
在スウェーデン日本国大使館ホームページより転載

フィンランド同窓会幹部会、総会、セミナーの開催

2015年10月15日、ヘルシンキ大学において、フィンランド同窓会幹部会、総会、セミナー”Academic Links Between Finland and Japan”が開催された。

幹部会では4名のボードメンバーが今年度の活動について振り返ると共に、来年度の活動について議論した。続いて行った総会では、Kristiina Jokinenフィンランド同窓会長より同窓会の昨年度の活動報告と次年度の年間活動計画について説明があり、承認された。また、新しい会員が承認されると共に、2016年4月1日より任期開始となる新たなボードメンバーについて立候補があり、承認された。

総会の後には同会場において、JSPSストックホルム研究連絡センター、JSPSフィンランド同窓会、北海道大学ヘルシンキオフィスの共催により、“Academic Links Between Finland and Japan”と題したセミナーが開催された。本セミナーは、日本人研究者、フィンランド人研究者のネットワークと両国間の学術交流を深めることを目的として行われ、41名の参加者が集まった。

フィンランド在住の日本人研究者である大村裕子アークツアーズ・ジャパン代表取締役、齋藤桂シベリウス音楽院博士研究員、長津十ヘルシンキ大学博士研究員が研究活動やキャリアと助成金に関する講演を行い、同窓会員であるElina Oksanen東フィンランド大学教授が大学紹介および“Forest and Environmental Research in Japan”と題した講演を行った。増田隆一北海道大学教授は“Collaborations of biogeographic studies between Japan and Finland”と題した講演を行った。最後に、Arja Kallio Academy of Finland Directorが“European Research Council (ERC) in Horizon 2020”と題した講演を行った。

セミナー終了後には、レセプションが開催され、活発な意見交換が行われた。



総会参加者による集合写真



Elina Oksanen教授による講演

IVA-JSPSセミナーの開催

IVA-JSPSセミナーは、著名な研究業績を有する日本の研究者を招聘し、現地学術・経済関係者における日本の科学技術への関心喚起、当該分野における両国間の学術交流の推進等を目的とする講演会である。

2015年度1回目となる今回は、JSPSストックホルム研究連絡センター、スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)、在スウェーデン日本国大使館、瑞日基金の共催で11月3日に、スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)において、矢野浩之京都大学生存圏研究所教授および渡邊政嘉経済産業省紙業服飾品課長を招聘し、“The future forest industry – What could Sweden learn from Japan?”をテーマに開催した。

セミナーでは冒頭のLars Berglundスウェーデン王立工科大学教授によるイントロダクションに続き、矢野教授による“The future direction of bio-based materials inspired by nano- to micro-structures in plants”と題した講演、渡邊課長による“Strategy to create advanced biomass industry”と題した講演が行われた。講演後にBerglund教授、Tom Lindströmスウェーデン王立工科大学教授、Elisabeth Backteman産業省State Secretaryがコメントを述べた後、矢野教授、渡邊課長、Berglund教授、Lindström教授、Backteman State Secretaryが登壇してパネルディスカッションを行い、参加者からの質問も受け付けて同セミナーのテーマについて活発な意見交換を行った。



矢野教授による講演



渡邊課長による講演



パネルディスカッションの様子

第3回東北大学・KTH国際ナショナル・ワークショップの開催

2015年11月12日～13日にかけて、JSPSストックホルム研究連絡センター、東北大学、スウェーデン王立工科大学(KTH)の共催で、KTHにおいて、流体科学分野とスピントロニクス分野のワークショップを開催した。

本ワークショップは、東北大学とKTHの共通の強みである流体科学分野とスピントロニクス分野の融合研究による新たな研究展開のビジョンを構築することを目的としたものである。

初日は流体科学、2日目はスピントロニクスをテーマとし、東北大学より11名、KTH、ヨーテボリ大学、ウプサラ大学より10名、計21名の研究者が講演を行った。講演後には活発な意見交換が行われた。



ワークショップ参加者集合写真



Frederik Lundell KTH准教授による挨拶



早瀬敏幸東北大学教授による挨拶

2015年度第1回 KVA-JSPSセミナーの報告

東京大学大学院工学系研究科 教授 幾原雄一

本年7月16日～7月23日までのほぼ一週間、スウェーデン王立科学アカデミー (KVA)とJSPSストックホルム研究連絡センターからの招聘を受け、Linköping UniversityおよびChalmers University of Technology(Göteborg)でセミナー講演および各機関の研究者と交流する機会を得ました。KVA側は、Chalmers University of TechnologyのEva Olsson教授と Linköping UniversityのLars Hultman 教授がホストを務められました。

まず、スウェーデン到着翌日の17日に開催された Linköping大学でのセミナーでは、JSPSストックホルム研究連絡センター 長の阿久津先生のご挨拶の後、筆者は「原子分解能STEMによる粒界原子構造と物性」というタイトルで講演をしました。近年球面収差補正を用いた走査透過電子顕微鏡法(STEM)の登場により、材料中の単原子カラム一個一個について、その位置や元素の識別のみならず、局所的な電子状態の解析までが可能となりつつあります。本講演では、筆者らのグループが進めている最新の成果で、本手法をアルミナセラミックス、バリスター、酸化物超格子、金触媒、リチウムイオン電池などの粒界や界面の原子構造解析に適用し、これより得られた新たな材料設計の指針やその機能発現メカニズムについて紹介しました。講演後にも多くの質問を頂き、活発な議論ができましたが、日本の企業と共同研究をされている先生方もおられ、議論はさらに盛り上がりました。その後、昼食をはさんで電子顕微鏡担当のPer Persson准教授から同大学に導入された最新の300 kV級収差補正STEMの見学と各研究室の案内をして頂きました。



幾原教授による講演

一方、Göteborgでは、7月20～23日にOlsson教授らが主催しているEuropean workshop on Advanced in Situ TEM/STEMという国際ワークショップが開催されました。このワークショップは、主に環境型透過電子顕微鏡法で材料の種々の動的変化を高分解能かつその場観察する手法や観察結果の解釈を対象とした会議で、液体中の材料挙動、高温化の材料挙動、電池反応のその場観察など最先端の成果が発表されておりました。本ワークショップには、収差補正装置を世界に先駆けて開発した前Darmstadt工科大学のRose先生やCEOS社のHeider先生ら錚々たるメンバーを含め100名ほどの研究者が参加しておられました。日本からも国研や大学の先生をはじめ電子顕微鏡メーカーの技術者も参加されていました。発表は全て招待講演の形式でしたが、筆者の講演は、本ワークショップの中で、KVA-JSPSセミナーという特別講演の位置づけをして頂き、Olsson教授による筆者の紹介、阿久津先生のJSPSとしてのご挨拶と本プログラムの紹介の後、「粒界原子構造と粒界／転位の相互作用」というタイトルで発表致しました。材料の塑性変形挙動はその粒界の構造と密接に関係しております。たとえば高温では粒界すべりが主な変形機構として働く一方、転位が活動する場合は、粒界と転位の相互作用が重要となります。本講演では、TEMその場インデンテーション法を用いた粒界と転位の相互作用のその場観察に関する成果を中心に、粒界性格—粒界構造—粒界すべりの相関性、種々の材料の転位芯構造、転位間相互作用、粒界と転位の相互作用などについて定量的に明らかにした結果について発表しました。講演後も活発な質問が続き、大変実りある議論ができたと思います。セミナー終了時には、JSPSストックホルム研究連絡センターのメンバーともどもChalmers University of Technologyの電子顕微鏡センターを見学させて頂きました。また、本ワークショップの期間中は毎晩晩餐会があり、スウェーデン以外にもヨーロッパ諸国のこの分野の多くの方々ともワインを片手に深い親交を温めることができました。さっそく、Chalmers University of Technologyから東京大学へ博士研究員を派遣したいとの話を頂き、今後この分野において、両国の学術交流がさらに深まることを期待しております。

最後になりましたが、今回の筆者のスウェーデンへ訪問が大変有意義かつ充実したものになりましたのも、Olsson教授、Hultman教授ならびにJSPSストックホルム研究連絡センターの阿久津センター長、川窪副センター長、村上様ら関係各位のご尽力によるところであり、ここに改めて御礼申し上げます。

SAC Activity Seminar: "Japanese Ethics and Technology"

専修大学経営学部 准教授 間嶋崇

私がスウェーデンのウプサラを訪れたのは、冷たい雨がしとしとと降る、少し肌寒い9月初めのことであった。人生初めてのスウェーデンだったが、人は優しく、食事も美味しく、またセミナーも実り多く、印象深い滞在だった。

9/2,3の2日間に渡ってウプサラ大学のÅngström Laboratoryで行われたそのセミナーのタイトルは、**Japanese ethics and technology**。電子技術、医療技術、機械技術、情報技術、バイオ技術…。さまざまな技術が高度に発展していくなか、それらは、社会に対し何某かの豊かさを与えることもあれば、反対に、社会に何某かの負をもたらすこともある。とりわけ、近年の日本では、原子力発電所の事故など、負に面することも多いように思う。そのような中、われわれのセミナーは、そういった技術とわれわれ（哲学者ないし科学者）の関わりのあるあり方を、主に日本の哲学や文学の観点から議論した。総勢14人による発表に加えパネルディスカッションも実施。たくさんのオーディエンスも来ていただき、活発な議論が展開された。

私の発表タイトルは、**From "Green" to "Smart": The impact of Fukushima on "Green IT" in Japan**。私は、普段、経営学部に所属し、企業組織に関心を持っているがゆえ、私の発表は哲学的でも文学的でもなかったが、日本のサステナビリティに関わる情報技術（Green IT）の意味やその企業による実践の変遷・変転について科学人類学に発祥するANT（アクター・ネットワーク・セオリー）を用いて議論した。同じコンセプトも、国々の事情によって受け止められ方も異なり、したがってその実践も異なったものになる。私の発表では、日本におけるGITの実践が、もったいない精神や公害の経験、京都議定書に纏わる動き、さらには大震災の影響など、日本の歴史的コンテクスト（アクター）によって日本特有なものになっていることなどを示した。つまり、技術の実践というものは、複雑なアクターのネットワークで構成される「状況」に埋め込まれたものであり、ゆえに固有な実践あるいは変転が見られるものなのである。ではその中で、よりよき社会の実現のために、科学者や哲学者は何をなすべきか。われわれの役割は、この技術に纏わる「状況」に積極的に関与していく、つまり状況を織りなすアクター間との対話をより良き方向へと向かわせるべく媒介となっていくことなのではないかと考えるのである。

私のこの発表について、さまざまなご意見をいただいたことも、もちろんとてもエキサイティングなことであった。しかし、それもさることながら、私にとってさらにエキサイティングだったのは、ふだん交流の少ない海外の研究者や他分野の研究者との対話の機会があったことである。国内外の哲学者や文学とその思想、そして哲学的なアプローチ、文学的なアプローチ。こんな研究があったのか、こんな光の当て方があったのかと、そのすべてが新鮮。さらに、自身の関心に今までとは異なる接近の可能性を見つけることが出来た。私が好きなナラティブアプローチの研究者が口を揃えて言う「異質な他者との対話の重要性」をまさに体感したように思う。

日本から遠く離れたスウェーデンの地で、私は日本の哲学・文学の面白さに出会った。

※最後になりますが、日本学術振興会、JSPSストックホルムオフィス、JSPS同窓会、そしてウプサラ大学のみなさまに対しまして、このような機会を頂戴したこと、この場をお借りし、心より御礼申し上げます。



間嶋准教授による講演

「ポスト2015年時代における日本の開発協力」(セミナー・国際会議)

政策研究大学院大学 教授 大野 泉

2015年9月28日から10月2日までJSPSの招聘でストックホルムに滞在し、(1) 第60回Stockholm Seminar on Japanにおいて「ポストMDGs時代における開発協力と日本の貢献」をテーマに講演するとともに、(2)

「Japanese and Nordic Development Cooperation in a Post-MDG Era」と題する国際会議に参加し、新しい時代の開発協力における日本の国際貢献のあり方について報告、及び北欧の研究者と意見交換を行った。いずれもストックホルム商科大学欧州日本研究所(EIJS)とJSPSストックホルム研究連絡センターとの連携企画であり、加えて(1)は在スウェーデン日本国大使館、(2)は大阪大学にも共催いただいた。

講演では、スウェーデンの援助との比較を念頭におきながら、過去60年にわたる日本の援助政策の変遷と成果を紹介し、そのうえで日本政府が2015年2月に策定した「開発協力大綱」の特徴、および今後、新大綱がかかげる「質の高い成長」の実現にむけて日本が果たすべきユニークな役割について、次の3点を強調した。

第1に、新興ドナーが活発に経済協力を展開し、人道支援が中心だった欧州ドナーが成長支援に関心をもつようになり、日本は今まで以上に「協力」と「競争」を意識して取り組む必要がある。特に自助努力を重視するアジア的な開発思想をアジア新興ドナーと一緒に国際社会に積極的に発信していくと同時に、日本の比較優位を活かした開発協力の実施が益々重要になっている。第2に、比較優位について、日本は「成熟したドナー」、「信頼できる知的パートナー」、そして「質的リーダー」を強みとして意識すべきである。日本は課題解決先進国であり、自らの国造りから得られた成功・失敗経験、さらに現在直面している少子高齢化等の課題を相手国と共有し、解決にむけて協働ができる。また、日本だけでなく、過去にODAを通じて構築してきたアジアの人材・組織ネットワークを動員した協力もできる。第3に、こうした取組を効果的に実施するために、「連携型協力」を一層強化すべきである。民間企業、地方自治体やNGOを含む国内組織、またアジアの人材・組織ネットワークなど、多様な開発協力の担い手との連携メカニズムを構築すべきである。

質疑応答では、新・開発協力大綱が謳う「質の高い成長」(どのように達成するのか)、中進国への協力(スウェーデンの援助は貧困国に集中)、日系企業を含む民間連携(スウェーデンは自国企業の支援はしない)、日本が従来から行っているインフラ支援と地域開発(どのように環境社会配慮を行うのか)など、借款スキームをもたず無償・人道支援を中心とするスウェーデンの援助の観点を交えて、活発な意見交換が行われた。

これら2つの企画は、日本政府が2015年2月に開発協力大綱を策定し、また9月25~27日に国連「持続可能な開発サミット」で2030年までの開発アジェンダとして「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択された直後に実現し、今後の開発協力と日本の貢献を考えるうえで、これ以上ないタイムリーなものとなった。さらに、EIJS所長のマリー・ソデルベリー教授は長年、日本とスウェーデンの学術交流に尽力され(平成27年度外務大臣賞を受賞)、同教授の豊富なネットワークのおかげで、開発協力大綱について北欧の日本研究者と議論するという、きわめて貴重な機会となった。

このほか、スウェーデン国際開発庁(SIDA)やNGO、研究者とも面談し、スウェーデンの援助動向や民間連携への取組などについて情報収集することができ、非常に有意義な訪問となった。

現地で大変お世話になったJSPSストックホルム研究連絡センター、EIJS、また在スウェーデン日本国大使館に深くお礼を申し上げたい。最後に、マリー・ソデルベリー教授の貢献に負うところが多いが、北欧における日本研究者の層の厚さに強い感銘をうけた。今回訪問するまでは、北欧で専門家・若い研究者が日本の開発協力をテーマに、民間連携から安全保障まで(時には日本語を交えて)多角的に議論する機会があるなど、想像すらしていなかった。こうした知日派の研究者ネットワークを維持・拡充していく意義は大きい。



大野教授による講演

KVA-JSPSセミナー報告

京都大学物質-細胞統合システム拠点 教授 今堀 博

2015年10月11日から22日までスウェーデン王立科学アカデミーと日本学術振興会の招きでストックホルム、ウプサラ、ヨーテボリ、ルンドの各都市に滞在し、学術交流を行ったのでその感想も含めて紹介したい。10月11日に関西国際空港をフィンエア便で出発し、ヘルシンキを経由して、ストックホルムに約13時間で到着した。気温は5-10℃で日本の12月の寒さであった。10月12、13日にスウェーデン王立工科大学（KTH、ホスト：リチェン・スン教授）、10月14、15日にウプサラ大学（ホスト：レイフ・ハーマーストローム教授）、10月16、17日にチャルマース工科大学（ヨーテボリ、ホスト：ボー・アルビンソン教授）、10月18-20日にルンド大学（招聘の代表ホスト：ヴィリー・サンドストローム教授）を訪問し、「光誘起電荷分離とその応用を目指した分子工学」との内容で講演を行った。各大学では講演に先立ち、ストックホルム研究連絡センター長阿久津秀雄氏から日本学術振興会事業の説明があり、参考資料などが配布された。日本との学術交流に多くの研究者が興味を持っているようで、日本学術振興会事業を宣伝する良い機会になっているように感じた。各大学では多くの関連分野の研究者と討議を行ったが、ホスト役の先生方とは旧知の間柄であり、人工光合成、有機太陽電池に関する共同研究の打合せを含めて極めて充実した訪問となった。最終地ルンドからは海を越えたデンマークのコペンハーゲン国際空港が近く、電車では約30分で到着する。最終日の10月21日は同空港からヘルシンキを経由して、10月22日早朝に良い思い出を携えて日本に戻ってくることができた。



ウプサラ大学での今堀教授による講演



ルンド大学KEMICENTRUM

今回のスウェーデン訪問で最も印象深かったのは、KTHで博士学位審査の代表調査委員（opponent）を務めたことである。スウェーデンでは国外の関連分野の先導的な研究者を代表調査委員として招聘する。KTHでは公聴会は専用の傾斜の強いすり鉢型の講義室を使い、一般公開で午前10時から開始される。当日はまず10-20分程度で代表調査委員がスライドを使い、当該研究の重要性、申請者の研究の業績を一般向けにやさしく説明する。続いて、30-40分で学位申請者が研究内容を説明した後、代表調査委員との一対一の討議が時間無制限で始まる（通常は1時間程度とのことだが、私の場合、40分で質問することがなくなってしまった）。その後、学位申請者和其他の3名の調査委員との討議、最後に一般聴衆を含めた討議が行われる。公聴会終了後、別室で、委員長、調査委員、学位申請者の指導教員による審査結果の評価会議があり、この会議で承認されて、博士号授与が正式に決定される。シャンパンによる博士号授与決定のお祝いの後、申請者と上記のメンバーは午後1時頃から遅い昼食をともにする。実は同夜にも学位申請者が家族、友人、指導教員を含む関係者を招待して、別に盛大なパーティーを開き、私も招待されて、博士号授与をお祝いした。審査過程の透明性が高く、また調査委員と学位申請者の長時間の討議を通じて、学位申請者の研究能力の向上を図る工夫に感心した。日本の博士学位審査と大きく異なることが多く、私も事前の準備が大変ではあったが、非常に良い経験をさせてもらった。最後にお世話になった日本及びストックホルムの日本学術振興会関係者及びスウェーデンで面会したすべての研究者に厚くお礼申し上げます、結びにさせていただきます。

その他打合せ・来会等

Imre Pázsit シャルマーシュ工科大学名誉教授(スウェーデン同窓会幹部)の来会(9月3日)

スウェーデン同窓会幹部のImre Pázsit シャルマーシュ工科大学名誉教授が当センターを訪問し、2016年1月開催予定の第4回Sweden-Japan Academic Networkおよびスウェーデン同窓会10周年記念シンポジウムについて打ち合わせを行った。



スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)訪問(9月8日)

Johan Weigelt事務局長兼副会長、Maria Dollhopf国際コーディネーター、Edvard Fleetwood瑞日基金事務局長、佐藤政文在スウェーデン日本国大使館一等書記官と、今年度開催予定のIVA-JSPSセミナーの日程や内容について打ち合わせを行った。また、来年度以降の同セミナーについて意見交換を行った。

スウェーデン教育・研究省研究政策部 Mattias Jennerholm部長・Marija Milivijevic職員の来会(9月14日)



スウェーデン教育・研究省研究政策部のMattias Jennerholm部長、Marija Milivijevic職員が当センターを訪問した。日瑞の大学間交流、大学の国際化、共同研究等の交流状況について情報交換し、当方からJSPS国際交流事業について説明した。

Svein Grandum 駐日ノルウェー王国大使館科学技術参事官、Julie Christiansen, The Research Council of Norway(RCN) シニアアドバイザー、Unni Kvernhusvik Sagberg, Norwegian Centre for International Cooperation in Education(SIU) アドバイザーとの会談(9月23日)

Svein Grandum 駐日ノルウェー王国大使館科学技術参事官、Julie Christiansen RCNシニアアドバイザー、Unni Kvernhusvik Sagberg SIUアドバイザーとミーティングを行った。今後のイベント、セミナーに対する当センターからの協力の可能性について質問を受け、情報提供を行った。また、JSPS研究拠点形成事業について質問を受け、説明した。



井上真奈美 東京大学特任教授の来会(9月24日)

学位論文審査のOpponentとして来瑞中の井上真奈美東京大学特任教授が当センターを訪問した。井上特任教授より、日本とスウェーデンの研究環境の違い、研究内容、学生交流の現状について説明があり、当方からはJSPS外国人研究者招へい事業および日本とスウェーデンの大学間交流状況について説明した。



鈴木滋彦 静岡大学副学長(国際戦略担当)の来会(9月25日)



マルクス・ヴァーレンベリ賞受賞式、記念シンポジウムに合わせて来瑞中の鈴木滋彦静岡大学副学長(国際戦略担当)が当センターを訪問した。鈴木副学長より静岡大学における研究費に関する取り組み、国際化への取り組みについて説明があり、当方からはセンターの活動について説明した。

芝崎祐二 岩手大学准教授の来会(9月25日)

岩手大学とリンネ大学の協定締結の話を進めるために来瑞中の芝崎祐二岩手大学准教授が当センターを訪問した。芝崎准教授より、リンネ大学との協定締結、オンライン授業の計画について説明があり、当方からはJSPS国際交流事業、センターの活動について説明した。



大野泉 政策研究大学院大学教授の来会(9月28日)



ストックホルム商科大学にて開催される「Stockholm Seminar on Japan」および国際会議参加のために来瑞中の大野泉政策研究大学院大学教授が当センターを訪問した。大野教授から研究内容、同セミナーおよび会議における講演について説明があり、当方からはセンターの活動について説明した。また、国際交流や途上国支援について意見交換した。

渡邊政嘉 経済産業省紙業服飾品課長、 Maria Dollhopf スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)国際コーディネーターの来会(9月28日)

マルクス・ヴァーレンベリ賞受賞式、記念シンポジウムに合わせて来瑞し、11月3日のIVA-JSPSセミナーで講演予定の渡邊政嘉経済産業省紙業服飾品課長、およびMaria Dollhopf IVA国際コーディネーターが当センターを訪問した。渡邊課長からセルロースナノファイバー研究開発戦略について説明があり、Dollhopf国際コーディネーターと共に、2015年11月開催のIVA-JSPSセミナーについて協議した。



Gunnar Öquist ウメオ大学名誉教授、 Mats Benner ルンド大学教授の来会(9月29日)



Gunnar Öquistウメオ大学名誉教授とMats Bennerルンド大学教授が当センターを訪問した。両教授より研究内容等の説明があり、当方からは世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)等について説明した。

森元誠二 在スウェーデン日本国大使送別会の開催(10月12日)

森元誠二在スウェーデン日本国大使の離任に伴い、森元大使夫妻を囲んで送別会を開催した。送別会には、佐藤政文在スウェーデン日本国大使館一等書記官、阿久津センター長、川窪副センター長、廣瀬国際協力員、村上国際協力員、タシマ現地職員が参加した。森元大使より今後の日瑞学術交流促進に関して激励の言葉をいただき、当方はこれまでの活動にご協力いただいたことに感謝の意を表した。



ルンド大学医学部訪問(10月19日)



ルンド大学医学部を訪問し、Gunilla Westergren-Thorsson医学部長、Karin Frydenlund International Office Head、Lars B Dahlin教授、David Gisselsson Nord Cancer Biology Programme Directorとミーティングを行った。ルンド大学と名古屋大学の交流に対する当センターからの支援の可能性について質問を受け、情報提供を行った。また、JSPS外国人研究者招へい事業について質問を受け、説明した。

スウェーデン同窓会幹部 Imre Pázsit シャルマーシュ工科大学名誉教授、 Göran Thor スウェーデン農業大学教授の来会(10月23日)

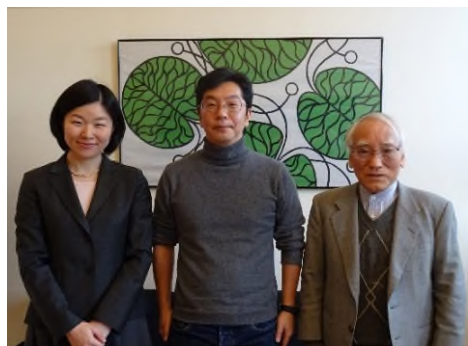
Imre Pázsit シャルマーシュ工科大学名誉教授と Göran Thor スウェーデン農業大学教授が当センターを訪問し、2016年1月開催予定の第4回 Sweden-Japan Academic Network とスウェーデン同窓会10周年記念シンポジウムの講演者、内容について打ち合わせを行った。

リンシェーピン大学訪問(10月26日)

リンシェーピン大学を訪問して Monica Mellberg 国際交流コーディネーター、Åsa Karlsson 国際交流コーディネーターとランチミーティングを行い、学生交流について説明を受けた。午後には Heriberto Rodriguez-Martinez 教授を訪問し、2016年1月開催予定のスウェーデン同窓会セミナーについて打ち合わせを行った。



村山英晶 東京大学准教授の来会(10月28日)



サバティカル制度を利用し、スウェーデン王立工科大学(KTH)において研究を行っている村山英晶准教授が当センターを訪問した。村山准教授から研究内容、東京大学におけるサバティカル制度およびKTHとの交流状況について説明があった。当方からはJSPS国際交流事業、日瑞の学術研究交流状況について説明した。

山崎純 在スウェーデン日本国大使表敬訪問(11月4日)

山崎純在スウェーデン日本国大使着任に伴い、阿久津センター長、川窪副センター長、廣瀬国際協力員、村上国際協力員、タシマ現地職員が山崎大使を表敬訪問した。

日本国大使館と当センターはこれまで様々な活動を連携して行ってきたことや、当センターの事業概要について説明した。



スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)訪問(11月17日)

Johan Weigelt事務局長兼副会長、Maria Dollhopf国際コーディネーター、Hampus Lindh 経済部門プロジェクトマネージャー、Edvard Fleetwood瑞日基金事務局長、Mia Horn af Rantzien Centre for Business and Policy Studies (SNS)CEOと、2015年度第2回IVA-JSPSセミナーの内容について打ち合わせを行った。

デンマーク工科大学および在デンマーク日本国大使館訪問(11月18日)

デンマーク工科大学および在デンマーク日本国大使館を訪問した。デンマーク工科大学では2016年2月開催予定のThe 2nd Japan Alumni Assemblyの会場候補地を見学した。在デンマーク日本国大使館では長谷川志麻在デンマーク日本国大使館Information and Culture Coordinator、田中久博東海大学ヨーロッパ学術センター所長、Jacob Skyt Jensen東海大学同窓会デンマーク支部会会員、Sam Kondo SteffensenJSPSデンマーク同窓会会長と同イベントの打ち合わせを行った。

在スウェーデン韓国大使館および韓国研究財団(NRF)ストックホルムオフィスからの来会(11月25日)



Daesup Chung在スウェーデン韓国大使館第一書記官、Jinju Ahn同研究者、Dongseong Han NRFストックホルムオフィス所長、Jaesung Jung同コーディネーターが当センターを訪問した。NRFストックホルムオフィスの活動紹介があり、当方からはセンターの活動内容について説明した。また、スウェーデンにおけるセミナー開催や研究交流の促進について意見交換を行った。

大浦真 北海道大学学生の来会(11月30日)

北海道大学のInternational Graduate Programを活用してカロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)で研究中大浦真氏が、当センターを訪問した。スウェーデンでの研究生活や将来の展望について説明があり、当方からはセンターの活動について説明した。



コラム～スウェーデンのパン「ルッセカット」～

クリスマス前、街中にはルッセカット(Lussekatt)というパンが登場する。サフラン入りの黄色いパンで、猫をかたどったS字型にレーズンが目として飾り付けられている。

ルッセカットは12月13日、ルチアの日に使われてきた。旧暦ではこの日は冬至にあたり、今日でもなお、ルチアがスウェーデンの暗い冬に光をもたらす日として祝われている。

スウェーデンにおけるルチアの起源を断定することは難しいが、シラケーサの殉教者聖ルチアという説の他、アダムの最初の妻で悪魔との間に子をもうけたルチアの説があり、その名前は光(lux)と悪魔(lucifer)から成っていると考えられている。

かつて悪魔は猫に姿を変えるとされ、猫の形をしたパンを食べることで悪魔を追い払うという意味があったとも言われている。

ルチアの日には、白いローブを着てキャンドルの冠を被り、手にもキャンドルを持った聖ルチアに扮した少女たちが見られる。街中や教会でルッセカットを配り、ルチアの歌を歌う。

11月初旬頃からカフェ、パン屋、スーパー、コンビニなどでルッセカットが見られ、街にはサフランの香りが漂っていた。



(参考)

Official site of Sweden

<https://sweden.se/>

Sweden's official website for tourism and travel information

<http://www.visitsweden.com/sweden/Things-to-do/Culture-heritage--arts/A-Traditional-Swedish-Christmas/>

Electrolux

<http://www.electrolux.co.jp/inspiration/features/quick-trends1/sweden/7/>

スウェーデン: 日本・スウェーデン学長サミット

2015年10月3日、「日本・スウェーデン学長サミット」が名古屋大学と駐日スウェーデン大使館の共催で開催された。

日本とスウェーデンの主要大学22校の学長・副学長が、両国の連携強化および国際化戦略について活発な議論を交わし、両国間の連携のポテンシャルの高さ、国際化と優れた研究分野における強固な相互関係の重要性を共通の認識とするに至った。

両国ともに研究・開発の強化を目指しているにも関わらずその交流学生の人数はまだ少なく、あらゆるレベルの交流における流動性拡大のための行動を起こすことが不可欠であると結論付けられ、教育の卓越性を満たすためにも産学連携は重要な要素であることも議論された。

駐日スウェーデン大使館

<http://www.swedenabroad.com/ja-JP/Embassies/Tokyo/4/2/----sys3/>

スウェーデン: 医学サイエンスセミナー 「貧困の病に対するノーベル賞」

ストックホルム日本人会の主催で、2015年11月24日、カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) において、医学サイエンスセミナー「貧困の病に対するノーベル賞」が開催された。

カロリンスカ医科大学で熱帯マラリア感染症の研究に従事する金子明教授により、2015年ノーベル生理学・医学賞受賞者の研究について日本語で一般にも分かりやすい講演が行われた。貧困の病の歴史と現状について実体験を交えた解説があり、講演後には活発な質疑応答が行われた。

ストックホルム日本人会

<http://japanskaforeningenisthl.se/>

スウェーデン: 学生を対象とした高等教育に関する調査

スウェーデン高等教育庁は過去に2回実施した学部生、大学院生を対象とした高等教育に関する調査、通称”Student and Postgraduate Student Mirror”を2015年秋に実施する。

同調査は、学生の学習と学習環境に対する認識についてのデータ収集を目的とし、学部生約11000人、大学院生約10000人に実施される。最終的な結果は2016年3月、4月ごろに発表となる。

Anette Gröjer高等教育庁プロジェクトマネージャーは本調査について次のように述べている。「学生の視点はスウェーデンの高等教育の発展にとって重要である。多くの大学でそれぞれ学生調査が実施されているが、国全体のデータが必要である。調査結果は機関レベル、教育分野レベルでも分析され、より多くの比較が可能となる。この結果を提供することが、高等教育機関のプログラム発展につながることを期待する。」

調査結果は大学だけでなく、政府、Student Union、政治家やその他の意思決定者にも周知する。

高等教育庁

<http://www.hsv.se/news/studentinputimportantforthedevelopmentofswedishhighereducation.5.6a0740f1150a87f42a75043.html>

デンマーク: Agnete Gersing氏がデンマーク高等教育・科学省新事務次官に就任

2015年11月1日、Agnete Gersing氏が高等教育・科学省新事務次官に就任した。

Gersing事務次官はコペンハーゲン大学で経済学の修士号を取得。1991年より経済省、1992年よりConfederation of Danish Employers (DA)、1994年より財務省に勤めた。1999年よりInstitute of Food and Resource Economicsの長官、2000年より財務省副事務次官、2005年より首相官邸Permanent Under-Secretary of State、2006年よりDanish Competition Authority長官、2010年よりDanish Competition and Consumer Authority長官を歴任した。

デンマーク高等教育・科学省

<http://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2015/new-permanent-secretary-in-ministry-of-higher-education-and-science>

デンマーク:2016年研究開発予算配分への合意

2015年10月29日、デンマーク政府は総額6億7千百万デンマーククローネ(約117億円)の2016年研究開発予算配分について、全政党より合意を得た。

2億9千8百万デンマーククローネ(約52億円)が研究とイノベーション経費に割り当てられ、うち1億6千百万デンマーククローネ(約28億円)が食品科学分野に割り当てられた。

1億9千7百万デンマーククローネ(約34億円)は技術、環境緑化産業分野の開発・実証プログラムに割り当てられた。

また、経費は企業やテロ研究にも割り当てられ、1億2千万デンマーククローネ(約21億円)が独自の研究に割り当てられた。

デンマーク高等教育・科学省

[http://ufm.dk/en/newsroom/press-](http://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2015/agreement-reached-on-distribution-of-research-and-innovation-funds)

[releases/2015/agreement-reached-on-](http://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2015/agreement-reached-on-distribution-of-research-and-innovation-funds)

[distribution-of-research-and-innovation-funds](http://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2015/agreement-reached-on-distribution-of-research-and-innovation-funds)

ノルウェー:カブリ賞受賞者一般講演会

2015年10月31日、2014年度カブリ賞受賞者による「小さい穴を通る光、増殖する宇宙」と題した講演会が東京にて開催された。

カブリ賞とは、ノルウェー出身の米国人実業家で慈善家の故フレッド・カブリ氏が提唱し、2008年に米国カブリ財団、ノルウェー教育研究省、およびノルウェー科学アカデミーの共同事業として設立された。2年に一度オスロで授賞式が行われ、天体物理学、ナノサイエンス、神経科学の各受賞分野に100万米ドル(約123億円)の賞金、各受賞者にメダルと賞状が贈られる。

本年行われた講演会では、「宇宙のインフレーション理論の提唱」で天体物理学部門受賞のAlan H. Guthマサチューセッツ工科大学ヴィクター・ワイスコフ教授/同大学マーガレット・マックヴィカーファカルティフェローと、「ナノ光学の革新」でナノサイエンス部門受賞のThomas W. Ebbesen国際化学フロンティア研究センター長/ストラスブール大学高等研究所所長、同大学教授が講演を行った。

駐日ノルウェー大使館

http://www.norway.or.jp/norwayandjapan/policy_soc/tech_environment/kavlilecture2015/#.VkfE_suhfIU

東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構
<http://www.ipmu.jp/kavli-lecture>

ノルウェー:2016年度教育支援のための予算5億ノルウェークローネ増

ノルウェー政府は、貧困や紛争、危機の影響を受けている国への教育支援の予算を5億ノルウェークローネ(約70億円)増額することを提案した。この増額により、2016年にノルウェーが教育支援に配分する予算の総額は約28億5千万ノルウェークローネ(約404億円)になる。これは2013年以来、金額で11億5千万ノルウェークローネ(約163億円)、率にして68%の増加である。

小学校に通う女子児童の数を増やす取組には大きな進展があったが、中等学校へ進み卒業する女子生徒の数は多くの国でまだ非常に少ない。このため、政府は女子を対象とした取組を引き続き重視する。教育に関する新しい「持続可能な開発目標(SDG)」は、2030年までに「全ての人に、包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進すること」となっている。

ブルゲ・ブレンデ外務大臣はSDGについて次のように述べている。「教育に関するこのSDGを達成するためには、最も弱い立場にある子供たちに手を差し伸べなければならない。発展途上国では障害を持つ子供の90%以上が学校に通っていない。子供や若者が労働市場に参加するのに必要な知識とスキルを身に付けられるようにしなければならない。2020年までに世界で6億人の新規雇用が必要である。」

政府は、国際労働機関(ILO)を通じて一部提供される職業訓練に対する支援の強化と、ノルウェー主導で始まった、世界銀行の「Results in Education for All Children(Reach)」プログラムに対する資金提供を増やすことを提案している。また、「教育のためのグローバル・パートナーシップ(GPE)」とユニセフ(国連児童基金)を通じて提供する支援を拡大するほか、アフリカとアジアの教育分野における取り組み、緊急時における教育、女性の権利、ジェンダーの平等などへの支援を強化している。

駐日ノルウェー大使館

http://www.norway.or.jp/norwayandjapan/policy_soc/policy/globaleducation_2016/#.Vke7wsuhfIU

フィンランド:EU/ETA外からの留学生より授業料徴収

政府は、2016年1月よりEU/ETA外からの留学生に対し、高等教育機関における授業料徴収が可能となる法案を議会に提出した。法案によると、授業料はフィンランド語以外の言語で学ぶ学生にのみ課される。授業料は、年間1500ユーロ(約20万円)以上に設定されなければならないが、高等教育機関ごとの設定が可能である。

同法は2016年1月1日に施行され、授業料は2017年8月1日以降に高等教育機関での学習を開始する学生に課されるが、必要に応じてこれより早く授業料徴収を開始することも可能である。

この法案は、高等教育機関の教育機会向上と、財源の拡大を目的としている。競争の要因として教育の質を重視しており、授業料徴収対象の学生をフィンランドに留めることを視野に入れている。

徴収した授業料は、高等教育機関に配分される基礎財源の額に影響を及ぼさず、追加の財源として教育の質向上や教育支援サービスに使用される。この財源の総額はEU/ETA外からの留学生数、授業料、奨学金の額に依ることになる。

フィンランド教育文化省

<http://www.minedu.fi/OPM/Tiedotteet/2015/10/ETA.html?lang=en>

フィンランド: Global Education Industry Summit開催

2015年10月19日～20日の2日間にかけて、Global Education Industry Summitが経済協力開発機構(OECD)、欧州委員会、フィンランド教育文化省の共催で開催され、世界各国の教育大臣と教育関連の産業リーダーが教育を向上させるための新しい方針を提唱した。

参加者は、教育機会を拡大し教育の質を向上させる技術革新を組み込んだ学習環境の再設計の必要性について話し合った。また、教員がデジタル教材を効果的に使用できるよう、専門能力開発活動を通じた教員への支援が必要であることも示唆された。

同サミットは、21世紀の需要を満たすために教育が取るべき方向性に対し、「技術の革新、教育学、カリキュラムは学校と教員をサポートすべきである」という共通の見解を持ったと結論づけられた。これは生徒たちの学習結果を向上させるためであり、急速に変化する世界で、教員が上手く仕事をして生きるための知識と能力を持ち合わせていると確信するためである。また、政治と教育産業間の更なる対話の必要性について合意がなされた。

フィンランド教育文化省

<http://www.minedu.fi/OPM/Tiedotteet/2015/10/geis.html?lang=en>

Global Education Industry Summit

<http://www.oecd.org/education-industry-summit/>

リトアニア: 日本・リトアニア生命科学シンポジウム開催

2015年10月7日、東京大学・伊藤国際学術研究センターにおいて、駐日リトアニア大使館、リトアニア研究評議会、東京大学、日本学術振興会(JSPS)の主催により、「日本・リトアニア生命科学シンポジウム」が開催された。

同シンポジウムは、日本・リトアニア両国の先端科学分野の研究内容を相互に紹介し、中欧・東欧において特に先端科学技術産業の発展に注力しているリトアニア共和国との間で、研究活動の相互理解と国際交流をさらに深めることを目的としている。

冒頭に、メイルーナス駐日リトアニア共和国大使、古谷東京大学理事・副学長、岸本文部科学省大臣官房審議官(科学技術・学術政策局担当)が挨拶した後、リトアニア共和国側7名、日本側7名の計14名の研究者が講演し、活発な意見交換が行われた。

シンポジウムの最後には、JSPSの浅島学術顧問およびリトアニア研究評議会のパウザ議長から、シンポジウムの総括と、今後の両国間における共同研究等の発展への期待などが述べられ、日本・リトアニア両国の研究者にとって、貴重な交流の場となった。

日本学術振興会

<https://www.jsps.go.jp/information/index4.html>

“KI Bladet” ~2015 NO.3~

ストックホルム研究連絡センターがオフィスを置くカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) では、“KI Bladet”という学内誌を発行しています。誌上で提供されている内容の一部を紹介いたします。

KI Bladet <http://ki.se/nyheter/ki-bladet-karolinska-institutets-personaltidning>

ハムステン学長によるプロローグ

ハムステン学長は、医学研究の優位性を高めることと、研究教育の予算増加を重要視し、次のように述べた。

・医学研究の優位性

スウェーデン政府が2016年秋に審議予定の研究法案に対する我々のコメントを、10月末に提出する。スウェーデンは世界トップレベルの科学国家となるべきであり、経済成長には研究成果が不可欠であるというのが、政治家の共通見解である。それゆえ、医学研究を含めたスウェーデンの高等教育機関が、激しい国際競争に対して強化されていない点が気がかりである。生命科学は公的資金を得た唯一最大の研究分野だが、その発展には、高等教育機関で行われる世界トップレベルの医学研究が必要である。医学研究の優位性を高めることに尽力する必要がある。

・学術研究、イノベーション、教育の予算を2倍に

カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) は学術研究、イノベーション、教育に対する総予算割当が10年以内に2倍になると確信している。そして、この資金の用途について以下を想定している。

- ・大学レベルにおける、有望な若手研究者向けポスト増加
- ・国の技術基盤に属さない高額備品
- ・学術研究プログラムのフルタイム雇用者に対する高報酬
- ・イノベーション、国際化、IT構造、情報科学
- ・十分な規模の教員を保証する研究教育の資金

また、研究者主導のプロジェクトのために、スウェーデン・リサーチ・カウンシルの資金を増加する必要がある。



写真:ハムステン学長
(KI Bladetより転載)

国際的な教室における教授方法



写真: Jennifer Valcke博士
(KI Bladetより転載)

2015年9月7日から3年間、Jennifer Valcke博士はカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) の教員に対し、多様な文化と価値観が混在する国際的な教室において教授方法を適応させる支援を行う。Valcke博士は、ベルギーのUniversité Libre de Bruxellesにおける教育学開発者としての経験が10年以上ある。そこでは教員も学生も英語を母語としておらず、カロリンスカ医科大学の状況と似ているとValcke博士は述べる。

Rune Brautaset Directorが教育学賞を受賞



写真: Rune Brautaset Director
(KI Bladetより転載)

Rune Brautasetカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) 検眼研究プログラム Directorが教育学賞を受賞した。

Brautaset Directorは2000年よりカロリンスカ医科大学に勤め、検眼を研究科目として発展させてきた。臨床教育のための研究所を設立したことで、より効果的な研究、より多くの臨床教育が実現した。また、教育における持続可能な開発だけでなく、教材、オンライン教育、ジェンダーや多様な視点を統合した方法についても開発してきた。さらに、臨床検眼の修士プログラムを開発することで、教育の質を向上させた。また、博士課程の研究モデルを作り、カロリンスカ医科大学で検眼を教えるスタッフの多くに博士課程の研究をする機会を与えた。

同賞は、年に一度、カロリンスカ医科大学において教育学の発展、向上につながる貢献をした教員個人、教育チーム、または運営スタッフに授与される。

カロリンスカ医科大学

<http://ki.se/en/about/the-pedagogical-prize>

EDC-MixRiskがHorizon2020より資金獲得

2014年に提出された申請から判断すると、Horizon2020*からの資金獲得は競争率が激しかったことが伺える。応用評価で高評価を得ているカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) の多くの研究者が資金獲得できていない状況にある。

その状況下でEDC-MixRisk*は、社会にとっての明確な利益、話題性のある研究分野、異なる専門の研究者間のやりとりという素晴らしい組み合わせを携え、資金獲得に成功した。ホルモンかく乱物質の分野が欧州委員会にとって緊急の懸案事項であることが一つの勝因と見られている。

*Horizon2020: 2014年から7年にわたり総額約800億ユーロ(約10兆円)の資金助成する欧州連合(EU)の事業で、EUのこれまでの研究・技術開発枠組み計画の中で最大規模を誇る。多国間研究開発・イノベーション促進プロジェクトで、産業と学術研究を結びつけることを狙いとしている。

*EDC-MixRisk: 子供にとって安全な環境、次世代が環境化学物質によって生活を脅かされない環境作りを最終目的としたプロジェクト。リスク評価の方法を開発することで、ホルモンかく乱物質が子供に与える影響に取り組む。カロリンスカ医科大学を含むスウェーデンの6大学、その他ヨーロッパ地域の5大学、アメリカの1大学に所属する疫学者、化学者、生物統計学者、医師、分子生物学者、毒物学者のコンソーシアムを基盤としている。

EDC-MixRisk

<http://edcmixrisk.ki.se/aboutedcmixrisk/>

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしています。ストックホルムセンターHPをご覧ください。最新情報をご希望の方は以下URLから登録してください。
<http://www.jsps-sto.com/contact.aspx>

第4回Sweden-Japan Academic Networkの開催

スウェーデンにおける日本人研究者、JSPS事業経験者（JSPS同窓会メンバー及びfellowship内定者等）、日本に関心のあるスウェーデン研究者、国費留学生をはじめとする「日本」関連研究者間のネットワークの創設・強化及び日本・スウェーデン間の交流促進を目的とした会合を年1回開催しています。

日 時 : 2016年1月14日(木)
会 場 : スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)
講演者 : 仁科 浩二郎 名古屋大学名誉教授
Karl Grandin KVA教授

スウェーデン同窓会10周年記念シンポジウムの開催

2005年設立のスウェーデン同窓会が10周年を迎えるにあたり、その記念としてシンポジウムを開催します。

日 時 : 2016年1月15日(金)
会 場 : スウェーデン王立工科大学(KTH)
講演者 : 仁科 浩二郎 名古屋大学名誉教授
Stefan Ekman ウプサラ大学研究員
Janne Wallenius KTH教授
Elin Palm リンシェーピン大学研究員 他

スウェーデン同窓会セミナーの開催

スウェーデン同窓会、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、“Trans-Generational Disease Vulnerability: Does Epigenesis Explain it All?”をテーマとしたセミナーが開催されます。

日 時 : 2016年1月20日(水)～1月21日(木)
会 場 : リンシェーピン大学
講演者 : 久保田 健夫 山梨大学教授 他

2015年度第3回KVA-JSPSセミナーの開催

スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)とJSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、KVA-JSPSセミナーが開催されます。

日 程 : 2016年2月1日(月)カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)
2016年2月2日(火)ルンド大学
2016年2月3日(水)ヨーテボリ大学
講演者 : 門脇 孝 東京大学教授

第2回Japan Alumni Assembly in Denmarkの開催

在デンマーク日本国大使館、東海大学同窓会、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、第2回Japan Alumni Assembly in Denmarkが開催されます。

日 時 : 2016年2月12日(金)
会 場 : デンマーク工科大学

事業のご案内

二国間交流事業(共同研究・セミナー)

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者(若手研究者を含む)が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。

<http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/jrss.html> (日本語版)

<http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/index.html> (英語版)

外国人研究者招へい事業

(Fellowship Programs for Overseas Researchers)

本事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。

平成28年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

<http://www.jsps.go.jp/j-fpo/index.html> (日本語版)

<http://www.jsps.go.jp/english/e-fpo/index.html> (英語版)

また、本事業のうち外国人特別研究員(一般および欧米短期)についてスウェーデンからの平成28年度分申請受付を開始しております。外国人特別研究員(一般および欧米短期)は、博士号取得前後の優秀な諸外国の若手研究者に対して、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供するものです。

募集要項等はJSPSストックホルム研究連絡センターのHPにて御確認ください。

<http://www.jsps-sto.com/jspsfellowships.aspx>

JSPSサマープログラム

(JSPS Summer Program)

本プログラムは、アメリカ合衆国、英国、フランス、ドイツ、カナダ及びスウェーデンの6か国の博士号取得前後の若手研究者に対し、夏期の2か月間に、日本語及び日本文化等に関するオリエンテーションと、大学等研究機関における共同研究の機会を提供するものです。

スウェーデンからの平成28年度分申請受付を開始しております。募集要項等は以下のHPにて御確認ください。

STINT(推薦機関)HP

<http://www.stint.se/7/268>

JSPSストックホルム研究連絡センターHP

<http://www.jsps-sto.com/fellowship-summer.aspx>

日本学術振興会(東京本部)JSPSサマープログラムHP

(本プログラムの概要・参加者からの声を掲載しています。)

<http://www.jsps.go.jp/j-summer/index.html>

その他

カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet) 同窓会 会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍した事があり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

<https://www.network.alumni.ki.se/portal/public/Default.aspx?AcceptsCookies=yes>

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを jspsto@jspsto.com までお送りください。電子メールにて配信します。



表紙写真: 秋の紅葉

寒さを感じるようになった頃、木々が黄色やオレンジに色づき街行く人々を楽しませていた。木の周りにはカメラを手にした人が多く見られた。

(撮影 村上道子)

JSPS Stockholm Newsletter 第48号

編集長: 川窪 百合子

編集: 村上 道子

発行日: 2015年12月18日

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561

Website: <http://www.jspsto.com/> E-mail: jspsto@jspsto.com

JSPS
STOCKHOLM